

1980年代の目録をめぐるアメリカの動向

——大規模大学図書館の報告書を中心に——

Directions of Library Catalogs in the 1980's

—Based on an Analysis of Large American University Library Reports—

三 浦 逸 雄

Itsuo Miura

椎 葉 倣 子

Motoko Shiiba

Résumé

Library catalogs in the United States are undergoing a substantial change, called “the cataloging revolution.” The background of this change consists of three developments: 1) the increasing cost and difficulty of maintaining card catalogs; 2) the announcement of LC's closing of the catalog and adopting AACR 2 in 1981; and 3) the rapid advancement of technology.

Research libraries, especially large academic libraries, have been interested in questions related to the closing of card catalogs and the development of automated alternatives; committees or working groups on “the future of the catalog” were appointed in some university libraries and reports were published.

Thus, first, this paper traces the brief history of the card catalog, describes the present situation in cataloging, and compares the advantages of alternative display formats (card, book, COM, on-line) using a file of machine-readable bibliographic records.

Then, based on reports, catalog system configurations (interim and long-term) are outlined, and the problems involved in the development of a collection data base are discussed in relation to a resource data base. Also, as short-range solution, seven possible options for 1981 are examined in terms of 11 factors.

Finally, the features and recommendations of six university library reports (California at Berkeley, Cornell, Princeton, Yale, Michigan, Stanford) are reviewed and several suggestions are made for computerization of cataloging in Japan.

三浦逸雄：東京大学大学院教育学研究科博士課程

Itsuo Miura, Ph. D. Course, Graduate School of Education, University of Tokyo.

椎葉倣子：東京女子大学短期大学附属図書館

Motoko Shiiba, Associate Librarian, Junior College Library, Tokyo Woman's Christian University.

- I. はじめに
- II. 背景
 - A. カード目録の変遷
 - B. 目録の現状と問題点
 - C. 各種目録フォームの特徴
- III. 中・長期の目録システム
- IV. 1981年の選択—現行カード目録の継続/編成中止
- V. 主要大学図書館報告書の特徴と勧告
 - A. カリフォルニア大学バークレー校図書館 (UCBL)
 - B. コーネル大学図書館 (CUL)
 - C. プリンストン大学図書館 (PUL)
 - D. エール大学図書館 (YUL)
 - E. ミシガン大学図書館 (MUL)
 - F. スタンフォード大学図書館 (SUL)
- VI. おわりに

I. はじめに

現在、アメリカにおける図書館の目録は、“the cataloging revolution”¹⁾と称されているような変革期を迎えている。来たる1980年代にはカード目録を中心にした従来の目録システムが大きく変化しようとしている。そのひとつの表徴として、大規模な図書館（主として大学図書館）を中心に、この4、5年にわたって現行カード目録の編成中止 (closing) あるいは凍結 (freezing)²⁾をめぐってゆれ動いている事実をあげることができよう。

しかし、問題は単に現行カード目録の処置を云々するだけにとどまらず、将来の目録システムをいかに構想するのかという図書館の長期的な計画にかかわっているのである。従って、この動きには、テクニカルサービスはもちろんのこと、パブリックサービスを含め図書館のあらゆる部門の人々が関係している。更には、個別図書館の枠を越え、ネットワーク等の協同事業とも密接に関連し、ひいては全国ネットワークの動向にまでつながるものといっても過言ではなからう。

そこで、かかる大きな広がりを持つ問題をカリフォルニア大学バークレー校、³⁾ コーネル大学、⁴⁾ プリンストン大学、⁵⁾ エール大学、⁶⁾ ミシガン大学、⁷⁾ スタンフォード大学⁸⁾ の各図書館が公表した報告書を中心に、できるだけ広いパースペクティブから捉えてみたいというのが本稿の意図である。

しかし、“昨日、実行可能に思えたことが、明日には不可能もしくは望ましいものではなくなったりする。昨日の夢のような計画が、明日には陳腐なものとなってしまふこともある。”⁹⁾と評されているほど流動的かつ進行中の事柄である故に、本稿で言及しているいくつかの点について、更に新しい展開がなされているかもしれないことを最初に一言しておく。

II. 背景

A. カード目録の変遷

一説によればカード目録の起源は、フランスで雑誌の索引編集のためにカードを利用した1775年であるといわれている。1820年代にはイギリスの大学で使われた記録があり、アメリカの図書館に出現したのは、やや遅れて19世紀半頃であった。ロチェスター大学図書館が1846年に仮カード目録を、フィラデルフィア図書館会社が1857年に、ハーバード大学図書館が1861年に、ボストン公共図書館が1871年にカード目録の編成を開始した。¹⁰⁾ 当時の蔵書目録は専ら冊子体目録であり、その補遺版を作成するために、スリップに各図書の本誌情報を記入し、配列したのがアメリカにおけるカード目録の発端と伝えられている。

アメリカ議会図書館（以下LCと略す）は、1898年に印刷カードの作成をはじめ、1901年には他の図書館への頒布を開始した。これは画期的な事業であり、以後、LC

の目録情報が各館でつかわれることになり、目録作業を容易にして、カード目録編成の普及に力があつた。LCの印刷カードは、C.C. Jewett が冊子体目録の編成に当って提唱した“集中目録制”の部分的実現としてとらえることができ、ユニット・カード制、3×5インチの標準カードの採用でもあつた。また、頒布以前は各館独自の目録規則による図書館が多かつたが、印刷カードの利用は規則標準化を促進する一助となつた。こうして、漸次、浸透してきたカード目録の設置は、冊子体目録との相当長期にわたる併用期間を経て、その優れた機能から、単一館の蔵書目録として支配的な位置を占めるに至つた。カード目録の主な機能を2点挙げると、一つは所蔵についての変更、追加、廃棄等が自在にできて、蔵書に対する up to date な書誌レコードの作成ができることであり、他は、目録中に同一著者の全著作、同一著作の諸版、同一主題について全資料を集中する collocating 機能である。

しかし冊子体目録はこれにより消滅したわけではない。1942年に刊行を開始したLCの蔵書目録は1956年以降は *National Union Catalog* と発展し、現在は、*National Union Catalog Pre 1956* が刊行され広く活用されている。その他、1950年代中葉には使用中の目録カードを利用して、大規模な研究・大学図書館の蔵書目録が相ついで刊行された。¹¹⁾ これらは一館の枠をこえて、主として相互貸借や書誌的調査のツールとして活用されている。

B. 目録の現状と問題点

ここでは、第I章であげた六つの大学図書館の報告書にもとづいて、LCを含めた大規模カード目録の現状とその問題点をのべる。

これらの大規模図書館のカード目録に対応している蔵書数は、当然、何百万冊にのぼり、その目録体系は閲覧目録が概ね辞書体目録か、あるいは著者・書名目録と件名目録からなる分割目録で編成されている。逐次刊行物を別建としたり、時には特殊コレクション等に単一目録(ファイル)を編成する場合もある。中央館の閲覧目録はその大学図書館のユニオンカタログを構成し、また主題検索が件名アプローチであることは各館共通である。一方、事務用としてはシェルフリストと典拠ファイルを必ず備えている。ただ、中央館とその他の分館間が一本化して目録作成している場合は少なく、また一館中でも一般図書、逐刊、特殊資料等が単独に編成されている場合があるなど、統合シェルフリスト編成には至っていない。

い。

次いで、カード目録の規模を1977年のLCの状況によりみれば、約1,823万冊の図書に対し閲覧目録には約2,146万枚のカードが繰込まれ、同年の事務用目録のカードは約2,482万枚にも及んでいる。¹²⁾ 以下、主な大規模図書館の閲覧目録のカード概数は、ニューヨーク公共図書館が1971年末にそのカード目録を編成中止する時期には約3,000万枚であり、¹³⁾ ミシガン大学1,200万枚、コーネル大学(中央館)710万枚、パークレー校600万枚となっている。具体的な状況把握のためにコーネル大学を取り上げれば、中央館710万枚のカードは、8,050ケの引出しに繰込まれている。アメリカの図書館では1カードケースに70引出しの大型ケースがよく使われているが、それによれば115台のケースに当り、更に年間増加図書のために毎年3.2台のケースを増設しなければならない。¹⁴⁾ 日本の図書館によくみられる45引出しで換算すれば、約180台を要し、いずれにせよその占める床面積は相当の広さとなろう。このスペースの問題は蔵書の増加にともない際限がないだけに深刻で、閲覧室やレファレンスのサービスエリアといった他部門の業務スペースを侵害しているとの報告もみられる。

カード目録の有する最大の問題は“複雑さ”であり、これは編成が長期間にわたり続いたこと、その結果、目録の規模が大きくなったことに起因している。この“複雑さ”は、利用者にとっては利用しにくい目録となり、図書館にとっては、その維持に莫大な時間と労力を要し、経費高を招く結果となっている。¹⁵⁾

“複雑さ”を詳細に分析すると、新旧標目間の相違に起因する場合が最も多い。時代の推移によって、国家の興亡や分割が生じ、国名、地名、政府機関等の変更が行われることがある。その他多様な理由による団体名の変遷がある。また、長年の間には目録規則の改訂があり、新規則の適用を強いられる。これらはすべて標目変更を引き起す。標目のうち、いま一つのカテゴリーに属し、主題アプローチに用いられる件名も、変更が不可避である。LC件名標目表は1914年に初版が刊行され、現在8版であるが、常に新事態や新分野に対応した用語を採用してゆく方針であるから、標目の変更、廃止、新標目の追加等々が頻繁に行われてきた。これらの結果、目録内で新旧標目間の関連づけがされなければならない、図書館側は複雑な参照カード作成や、膨大な量の訂正作業を強いられて来た。が、要員の制限などからこうした作業を完全には遂行できずに一貫性を欠くこととなり、目録の

複雑さを増すことになった。加えて、図書館によっては、大規模になりすぎた辞書体目録を分割目録に編成替えをした際に補充すべき書名カードを欠落させたり、或は特殊コレクション新設あるいは配架位置変更後の別置記号等が目録カードに未記入であったために利用者に誤解や混乱を与えている。

また、カード目録が膨大となり、同一標目下のカード枚数が余りにも多数になったため求めているカードを見出せない場合がでてきた。例えばLCの場合、標目 U. S. Congress の下には16,933枚のカードが繰込まれている。同様に United Nations は 4,390枚、Shakespeare, William は3,842枚となっている。¹⁶⁾ この場合、引出しが5ヶ～20ヶにも及ぶとなればたとえ正確な書誌情報をもっていても、その検索は容易ではない。同一の言葉でも著者名、件名、書名と異質なカードが繰込まれている場合もあり、配列規則を熟知していない利用者は求めるカードに到達出来ないことにもなる。¹⁷⁾

こうして、単一の ABC 順ファイルで検索容易とされていた辞書体目録はもとより、検索機能別の分割目録でさえ、利用困難となりその維持が問題視されるに至っている。

国内最大規模の蔵書を誇る LC は、現在まで閲覧用に辞書体目録を編成し続けて来た。従って、前述のカード目録の問題点は LC の目録にも殆ど該当するといっても過言ではない。このことは、1967年の AACR 採用時に、旧規則により作成された膨大な量のカードの訂正が不可能であり、さりとて新・旧 2 本建のカード目録編成にも問題があり、その上、印刷カード、プルーフシート、Cataloging in Publication といった LC 目録情報を利用している多くの図書館の受ける甚大な影響を考慮すれば superimposition 方針をとらざるを得なかったことからみても明らかである。

その後、整理部門では、書誌コントロールの手段としてのカード目録を見直し、問題点を明確にして、その解決をはかる目的で、1972年4月に報告書をまとめた。¹⁸⁾ その検討内容は、LC のカード目録の現状、その編成と運営上の問題点、問題点解決のための提言、その提言を選択した場合の利点と欠点に及んでいる。そしてこの報告書は、他の図書館からの意見聴取のために1975年1月の Association of Research Libraries (以下 ARL と略す) の冬季大会で参考資料として配布された。この中で、著者は目録の機械化の重要性にふれ、機械可読データベースを発展させるべきであると指摘した後、二つの

新提案を行った。一つは新旧標目間に相違が生じた場合に、従来のようにカードの訂正をせずに各々の標目下に説明付ガイドカード¹⁹⁾を入れて関連づけを行うことであり、他の一つは、1975年12月31日にカード目録の全部または一部の編成中止をして、新目録を開始するというものであった。

以上の経緯を経て、LC のカード目録及び目録方針の変更が1977年11月4日付の LC *Information Bulletin* に正式発表された。²⁰⁾ 主な変更は次の4点である。

- (1) 1980年1月2日以降はカード目録への新記入の繰込みを中止し、機械可読データを用いて蔵書へのアクセスを提供する。
- (2) AACR 2 を採用し、同時に superimposition 方針を中止する。
- (3) デューイ十進分類法19版を採用する。
- (4) 件名標目システム変更の可能性がある。

上記の実施に当たっては、目録の機械化システムを期待しているが、実現不可能の場合の措置として次の点が併記されている。

- (1) 非ローマ字資料に対しては、実施開始までに機械化の可能性がないので、分割カード目録を編成する。但し機械化が実現すればこれを廃棄する。
- (2) ローマ字資料に対しても、完全な機械化システムが稼動出来ない場合は、廃棄を前提としたカード目録を併行する。

更に、計画の実施以前に改良を必要とする問題としては、機械化システムに関するコンピュータの信頼性、応答時間、検索方法、典拠レコードと書誌レコードの関連づけ、ターミナル等があり、その他にシェルフリスト・システム、旧目録と逐次刊行物との関連等、検討を要する点が明らかにされた。

慣例にしたがい、この LC の変更に対する他の図書館からの意見を徴するために、1978年1月の ALA 冬季大会開催時に集會が開かれた。その後、1978年5月に開かれた ARL 会議²¹⁾をはじめとして館種別や地域別に同様の検討が行われ、結局、同年8月の ALA の大会で、ARL、OCLC、BALLOTS 等からの要請により、LC はその計画の実施を1年間延期して1981年1月2日以降にすることを了承した。²²⁾

カード目録の編成中止(あるいは凍結)をふくむ LC の目録の変更が、1975年4月にはそれ程問題視されなかったのに対して1977年11月の発表では多大の反響を喚起した。そして ARL が中心となって実施時期の延期を要

請した主たる要因は、上記四つの新方針中、第2のAA CR2の採用とsuperimposition廃止により招来する新旧標目間の相違の処理について、各図書館の現状では対応の見通しがたたなかったことであろう。例えば、LCで新旧標目間の自動コントロールシステムが開発されても、個別の図書館に直ちに導入できる保証はない。近年蓄積して来たデータベースを有するところでは、新規採用で必至となる書誌レコードの変更は大きな問題である。また、データベースを持たない図書館であっても、分担目録作業方式によって間接にMARCを利用しており、そこでの変更は作成されるカードに反映され、その結果、そのカードが現行目録中のカードと一致しなくなることが予測される。多くの図書館が何らかの手段で目録を機械化しているだけに、LCの目録方針の変更は過去の例にはみられぬ程甚大なものとなるので、その対処には切実なものがあった。

現在みられる個別図書館における目録の機械化は、1970年代に入ってめざましいものがあった。目録作業機械化の嚆矢となったのは、1951年のキングカウンティ図書館(ワシントン州)の冊子体目録であり、1953年にはロスアンゼルスカウンティ公共図書館(カリフォルニア州)が児童図書の本子体目録を刊行している。²³⁾ 1960年代は科学教育強化のために多額の国家予算が大学にも配分された。その影響により、個別図書館においても潤沢な予算を持ち得、またコンピュータのハードウェアの進展が期を同じくしたことが相俟って、図書館の機械化は急速に進展した。

LCも同様に、1961年にCouncil on Library Resourcesの資金をうけ外部のコンピュータグループを招き、書誌レコードの機械化の適否を検討し、積極的に機械化をはかるべきであるとの結論を得た。そして1966年に大規模図書館16館の協力を得てMARCパイロットプロジェクトを開始し、1969年にMARC IIを完成している。プロジェクト開始当時の1968年6月に約5万レコードであったのが10年後の1978年5月末には約100万レコードを持つに至った。

MARC II テープの低廉な頒布は、OCLC, BALLOTSその他民間会社のデータベース構築を容易にし、加えて個別図書館が60年代にコンピュータに対する経験を積み重ねたことは、これらのデータベースを利用して行う分担目録作業を急速に促進させることになった。この方法によるカードの作成は、従来の印刷カードとは異なり、個別図書館の要求に応じた目録カードが作成出来ること

と、データベースに書誌情報の入っている場合はいわゆるコピーカタログングによればよく、目録カードには請求記号、見出し語のタイプ打込みや繰込みのための予備配列を要しない経済性が高く評価され国内に広く普及している。その結果は、1973年にLCの印刷カード販売枚数が450万枚でとどまったのに対して、OCLCでは520万枚印刷した数字からも明らかである。²⁴⁾

現在、ある種の言語による資料や、地図、政府刊行物、貴重書等の特殊資料は上記のデータベースには含まれておらず、図書館によっては、最近の新着資料であっても、コピーカタログングだけではすまないところもある。個々の図書館におけるコピーカタログングの占める割合は、一般に、蔵書中殆んどが英語資料である中小の大学図書館では90%代であり、外国語資料や特殊資料を相当有する大規模大学図書館では60~70%代であるといわれている。

C. 各種目録フォームの特徴

目録の機械化は整理部門内の改組をも伴う大きな変革であったが、それにとどまらず、蔵書へのアクセスに利用できる新しいメディアの出現をももたらした。つまり、データベースから、カード、冊子体、COM(フィッシュ、フィルム)が作成出来、またオンライン目録の利用が可能となった。これらのフォームの特徴について、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の報告書²⁵⁾とミシガン大学の報告書²⁶⁾にもとづいてまとめたのが第1表である。以下に各フォームの特徴を簡単に述べる。カードは最も慣れ親しんでいるフォームで説明をするまでもないが、従来のカードと異なる点は、前節で述べた如く、その作成段階での経済性が評価されていることである。しかし、カード目録維持において、最も経費のかかるファイリングや、目録カードへの追加、変更、廃棄等の作業は依然として改良されない。

冊子体目録は、コンピュータ用紙に打ち出したもの、印刷によるものがある。前者は技術的に最も作成容易であり、多くの図書館では逐次刊行物の所蔵目録やユニオンリストをこのフォームで作成し利用に供している。印刷は完成までに時間を要し、かつ経費高でもある。刊行頻度を頻繁にし、目録をup to dateに保つことは望ましいが、それも直ちに費用にはねかえってくる。更に、収録資料の範囲や書誌情報の詳しさも直接経費と関連してくる。このことはこの種の目録の典型的例であるニューヨーク公共図書館の本子体目録が、基本記入の下に完全な書誌情報を載せて、他の記入では省略した情報とな

1980年代の目録をめぐるアメリカの動向

第1表 機械可読書誌レコードより作成できる目録フォーム

フォーム	カード目録	冊子体目録	COM目録	オンライン目録
アクセス・ポイント	著者名, 書名, 件名 叢書名, call no, etc 組合せ不可能	” ”	” ”	(プログラムによる が) 技術的には制限 なし 組合せ可能
Boolean operations	不可 能	(作成時には) 可能	”	(検索時) 可 能
Browsing	可 能	”	ややむずかしい	不可 能
検索用機器	不 要	”	要(リーダー)つかい 方を覚える必要有	要(ターミナル)つかい 方を覚える必要有
利用場所, 時間	図書館内, 開館中	図書館内外の配布箇所, 必要時	リーダー設置場所 リーダーの利用可能時	ターミナル設置場所 ターミナルの利用可能時
各記入もとに等量の 情報	容 易	可能…経費高	容 易	可能…ファイル構成 による
up to date	可能…困難, 経費高	次期打出しで可能 自動的修正可能 (但し誤謬はセット 中に凍結)	” ” ”	即時に可能
ファイリング	ファイリング準備…機 械による カード・ケースへは人 手。複雑, 誤り多し, 経費高			
維持	いたみやすい 紛失有…補充困難 予備カード…初回作 成容易	紛失有…補充容易 任意のフォームで作 成できる	機械の故障有 ” ”	” ”
配布	不可 能	可 能 全冊子の量, 刊行頻 度(コスト要因)	複製 低廉	可能, 通信回線数に よる限定 距離(コスト要因)
製作費	低	高	最 低	最 高
スペース	広く必要, 経費高	棚, テーブル分	リーダーの設置場所	ターミナル設置場所
その他		一覧性あり	” 長時間検索…眼の疲 労。フィッシュはフィル ムより見やすい	検索時…眼の疲労
代表例	一般の大学・研究図書 館	ニューヨーク公共図 書館	ジョージア工科大学 図書館 トロント大学図書館	オハイオ州立大学図 書館

っていることから推測できる。また、コンピュータ用紙による目録は紙質がうすく長期間の利用には適さない。

COM 目録の最大の長所は、作製費が低廉なことである。書誌情報の追加、訂正等は次期打出しで可能となり、配布が容易である等、冊子体に類似した点を有する。ただ、製作は外部業者依頼が多く、検索時に機器を必要とし、利用者側の慣れといった要因が加わるので、普及には多少の時間を要するかもしれない。

オンライン目録には多くの優れた点があり、この出現によってカード目録の編成中止の可能性が出てきたといわれる程である。しかし、現在では、全ての個別図書館

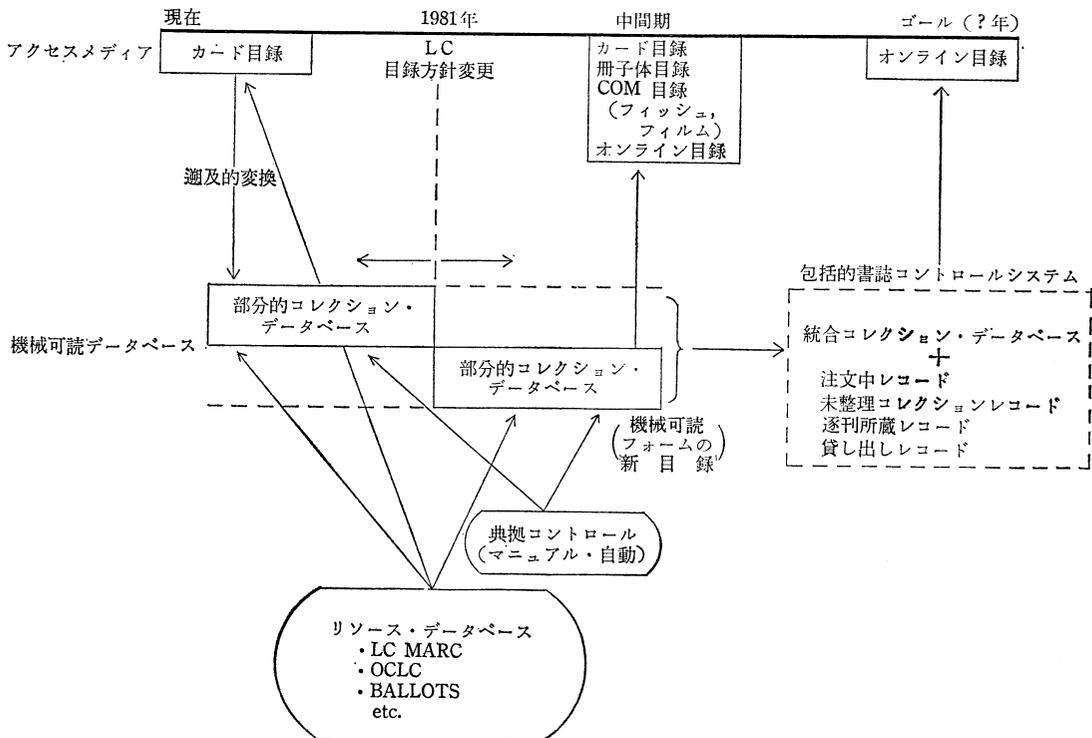
がオンライン目録の前提条件である全蔵書の完全なデータベースを持つには相当の期間を必要とすることが予測されるし、検索方法の改良もありうるし、ターミナルも十分に完備していない等の事情から、早急な利用はのぞめず、将来の可能性として評価され、期待されている段階である。従来の目録フォームに見られぬ点を挙げれば、アクセスポイントの柔軟性・多様性、訂正・追加・変更の即時可能、所蔵スペースの僅少、他館との協同作成可能、記録の維持容易、出力の柔軟性、整理業務以外の多目的に適用等であるが、一方、設備、維持、作成のコストは高額であり、急速な普及を妨げている。

III. 中・長期の目録システム

1973年から研究・調査活動を開始したカリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館²⁷⁾や同大学バークレー校図書館を除き、大学図書館が目録の将来について本格的に取り組み始めたのは、1975年1月に開催された ARL 会議以降のことである。そして、コーネル、プリンストン、ユール、ミシガン、スタンフォードの各大学図書館に委員会が設置されたのは1976年から1978年にかけてである。これらの大規模大学の他にも、ミシガン州立、ノースウェスタン、シラキュース、ルイジアナ、ケント州立などの大学図書館にも同様の委員会が組織された。²⁸⁾ 第IV章で紹介するように、各大学図書館における委員会の活動は、各々、固有の事情を反映しており、その報告書も詳細きわまるものもあれば簡略なものもある。また、最終報告もあれば予備報告もある。したがって、性質の異なる報告書を同一レベルに置いて比較検討するのは適切とはいえないが、いずれの報告書にも共通して認めることのできる二つの論点がある。それは(1)中・長期の目録システム、(2) 1981年の LC 目録方針の変更 (1978年 8月

の LC による延期発表以前の段階では1980年) への対処 (つまり短期の方針)、である。この二つは、相互に密接な関係を持ち、短期の方針は中・長期の展望をふまえた上で勧告されている。本章では中・長期の目録システムを、特にコレクションデータベース²⁹⁾に焦点をあてて概観する。

カリフォルニア大学バークレー校図書館をはじめとする主要な大学図書館報告書において、明示的にであれ暗示的にであれ、共通に描かれている目録システムの中・長期的展望を簡略に示したのが第1図である。目録システムの長期ゴールとして設定されているのは、オンライン目録を蔵書全体への主たるアクセス手段とし、これを COM や冊子体などの目録で補完する体制である。³⁰⁾ COM や冊子体による補完を必要とするのは、オンライン目録だけで利用者のニーズを完全にカバーしきれずとは考えられず、また探索パターンによっては必ずしもオンライン目録が最適ともいえないからである。例えば、特定主題についての文献を時間をかけてゆっくり検討しながら探す場合には COM や冊子体の方がより適切といえよう。更に、利用のピーク時に利用者を待たせること



第1図 目録システムの中・長期展望

なくその要求を充たすに足る台数のターミナルを配置することが（これはピーク時以外は何台かのターミナルが遊んでいることを意味する）、限られた資源の適切な配分かどうか議論のあるところである。³¹⁾

上記の長期ゴールを実現するためには、全蔵書の書誌レコードを含む機械可読ファイル（つまり、統合コレクション・データベース）の形成が不可欠の前提となる。統合データベースに基づく目録システムの長所として、次の8点が考えられよう。

- (1) 複数の場所から、オンラインで全蔵書の書誌レコードに即時アクセスが可能である。
- (2) ブール代数を用いた複雑な探索がオンラインを通して行える。
- (3) COM や冊子体による書誌、逐次刊行物リスト、近着リスト等を適宜作成できる。
- (4) オンライン目録を補完する COM や冊子体の目録を作成できる。
- (5) 記入や件名標目に変更・修正を必要とするとき、その作業を迅速かつ効率的に実行できる。
- (6) 自館のコレクション・データベースだけでなく、地域、全国、国際レベルのデータベースへのアクセスも可能になる。
- (7) 事務用目録やシェルフリストなどの書誌コントロールに必要なファイルの機能を提供し、収書、整理、貸出業務に利用できる。
- (8) 図書館の管理・運営のための情報、例えば蔵書成長パターン、目録作業の滞り、会計などについての詳細かつ正確な情報の提供が可能である。

現時点で、蔵書（全部もしくは大部分）のコレクション・データベースを維持している大学図書館はトロント大学やオハイオ州立大学など数えるほどでしかなく、大部分の大学図書館はカリフォルニア大学パークレー校のように部分的なコレクション・データベースを所有しているか、あるいはミシガン大学のようにまったく所有していないのが実状である。このことは、多くの図書館において、注文中、貸出し、逐次刊行物などのファイルが個別に機械可読フォームで維持されているにもかかわらず、蔵書の書誌コントロールシステムの中核となる閲覧目録やシェルフリストなどが依然としてカードフォームのままであることを意味している。目録の機械化といっても、OCLCシステムなどを利用したオンライン目録作業は、単に従来の目録カード作成業務が機械化され、能率的になっただけのことに過ぎない。すなわち、蔵書のデータベース

がカードフォームをとり続ける限り、第II章Bで指摘したカード目録をめぐる諸問題は、一向に解決されずますます深刻化してゆくことになる。

コレクション・データベースを所有していない図書館は、先に述べた長期ゴールの達成のために、まずデータベースの構築を開始しなければならない。その場合にも解決しなければならぬいくつかの問題が生じてくる。例えば、現行カード目録を続けながら、ある時点以降の目録を機械可読フォームで維持してゆくとする、重複ファイルを持つ結果となり、当然、経済的な問題に直面する。また、機械可読フォームで新しい目録を作成し始めた時点で、現行カード目録の編成を中止する場合には、この旧目録の処置が問題となろう。旧目録の処置については、一般的に次の三つの方法が考えられる。³²⁾ (1)カードフォームのまま存続、(2)カード目録のフィルム化、(3)機械可読フォームへの適時的変換。(1)の場合は、メンテナンスを最小限に抑えたとしても、カードの修正、変更、廃棄などの作業が半永久的に続くことになる。(2)は保全の面では(1)よりすぐれており、しかも妥当な費用でコピーを作成できる有利さを持っている。しかし、この方法はある時点で目録を凍結してしまうことになり、目録のメンテナンスが難しくなる。その上、利用のための機器や設置場所の問題も生じてくる。この(1)と(2)の最大の欠点は、新旧目録の複数ファイルが存在することになり、利用者の探索が複雑になることにある。この点、(3)は単一の統合コレクション・データベースの形成につながり、もっとも望ましい選択である。

ところが、“図書館目録の変換について、多くの人が抱く危惧の主たる原因は、そのプロセスに要する費用である。”³³⁾と指摘されている如く、適時的変換には財政上の難問が立ちばだかっている。書誌レコードを入力するための直接費用は、各図書館の必要とするレコードの内容により異なってくるが、MARCフォーマットを用いた1レコードあたりの入力費用は1.20ドルから2.80ドルの間という指摘がある。³⁴⁾今、仮にシェルフリストを変換に適切なデータとみなすならば、³⁵⁾1レコードあたりの入力費×シェルフリストのカード枚数が、データベース構築に要する大よその直接費用とみなすことができる。従って、変換プロジェクトには相当の費用と労力を投下しなければならず、その上、プロジェクトが完了するまで全面的な利益をひき出せないという事情もある。³⁶⁾

これまでの変換作業パターンは、タイプストあるいは

キーパンチャーが目録カードもしくは作業シートを1行1行読んで、機械可読フォームに変換してゆくものであった。このような方法は、財源の潤沢な図書館にのみ可能であり、大部分の図書館では労働賃金の上昇などの要因と相まって、ますます採用困難になっていた。ところが、LC/MARCを始めとして、いくつかのリソース・データベースの規模が拡大し、更に先駆的な図書館のコレクション・データベースが形成されるにつれて、これらのデータベースを利用して従来とは比較にならない費用で、個々の図書館のコレクション・データベース構築が可能となってきた。こうした好都合な状況が出現してきたとはいえ、リソース・データベースのレコードをそのまま個別図書館の蔵書の書誌レコードとして使えるわけではない。この点に関連して、B. Butler はリソース・データベースをコレクション・データベース構築に利用する際の問題点を四つ指摘している。³⁷⁾

- (1) リソース・データベースの提供できる機能は限定されており、そのサービスを図書館業務に適用することにも限界がある。たとえば、OCLCは参加館にシェルフリスト機能を提供できない。
- (2) 個別図書館のフォーマットがリソース・データベースでは許容あるいは利用されないかもしれない。すなわち個々の図書館が必要とするローカル・データ(各館独自の分出や副出記入、請求記号、別置記号、件名標目、注解、抄録等)をリソース・データベースから得ることができないかもしれないし、そこで処理されないかもしれない。
- (3) 典拠コントロール(著者名、件名等)が利用できないかもしれない。
- (4) 入力レコードの品質管理と詳しさの問題がある。これは全国ネットワーク形成における主要な関心事であり、かつOCLCやその他のリソース・データベースに関してもこれまで論議されてきた点でもある。

これらの問題点は、リソース・データベースの有する能力によって事情が変わってこよう。リソース・データベースとしての発展を計画しているトロント大学機械化システムは、参加図書館のローカルデータを含んだ書誌レコード(つまり、顧客ファイル)の収容を、その構想の一環としてうたっている。また、OCLCは現在、典拠コントロールを持っていないが、一方BALLOTSにはすでにスタンフォード大学の参照ファイルが入っており将来は参加図書館の参照ファイルが個別に組織される予定に

なっている。³⁸⁾

どのようなリソース・データベースを利用するにせよ、変換プロジェクトを実施する前に、いくつかのプランニングが必要となる。その主なものを以下に挙げる。³⁹⁾

- (1) 既存カード目録に入っている書誌レコードの範囲と内容を検討し、既存リソース・データベースのレコードを自館のニーズや基準に適合させる方法を決める。
- (2) 既存リソース・データベースに入っていないレコードを入力する方法を決める。入力作業は外部の業者に委託するか、図書館内部にプロジェクトチームを設けるか。どのような変換技術を採用するか。
- (3) 既存カード目録のレコードの品質管理の規準と修正・変更作業の手順を確立する。
- (4) 既存カード目録のレコードがAACR2採用後のレコードと適合できるように変更を検討する。

上記(4)とも関連してくるが、特に、典拠コントロールはコレクション・データベースの維持にとって不可欠の要素である。⁴⁰⁾ 典拠ファイルがカードフォームで組織されている場合はもちろんのこと、たとえそれが機械可読ファイルで維持されていようとも、典拠ファイルがコレクション・データベースと連結されていなければ、変更や修正作業はデータベース中の該当レコードひとつひとつに対して行わなければならない。他方、機械可読フォームの典拠ファイルがコレクション・データベースと連結されている場合、典拠ファイルで1度だけ変更や修正を行えば、自動的にコレクション・データベースのレコードが変更・修正される。⁴¹⁾ このような自動典拠コントロールシステムの実現により、データベースのメンテナンス時間が節約できるし、入力した標目と既存の典拠レコードが自動的に照合されるので、標目確立の際に典拠ファイルをチェックする必要もなくなる。

統合コレクション・データベースの構築には、以上述べたことの他にまだ多くの問題が残されている。ここではそれらを列挙するにとどめる。すなわち、逐次刊行物所蔵ファイル、整理中・注文中ファイル、医学図書館や法学図書館をはじめとする分館・部局図書館目録、非ローマ字資料、地図や政府刊行物などの特殊資料、といった問題である。

以上、簡単ではあるが長期の目録システムについて概観してきたが、長期ゴールの実現は技術的、財政的、人的、心理的な諸条件に大きく左右されることは言うまでもない。従って、各図書館のゴール達成に要する期間は

当然異なっただろう。

いずれにせよ、大半の大学図書館において、統合コレクション・データベースに基づくオンライン目録システムの実現はまだまだ先のことであろう。とすれば、実現までの期間、いわゆる中間期の目録をどのように構成してゆくかが当面の検討課題になってくる。この中間期の目録については、次章のテーマである“1981年の選択”と密接なかわりを持つので、なるべく重複を避けるため、ここでは大筋だけを述べることにする。

中間期の目録に関して、次の二つの可能性が考えられる。

- (1) オンライン目録システムの実現まで、現行カード目録を維持してゆく。この場合、目録カードの作成はOCLC等を利用したオンライン目録作業による。一方では、コレクション・データベースの構築がすすめられる。
- (2) ある時点で現行カード目録の編成を中止、もしくは凍結し、機械可読フォームの新目録を開始する。この場合、新しい目録へのアクセス・メディアはカード、冊子体、COM、オンラインのいずれか、あるいはそれらの組合せとなる。

(1)は、利用者がこれまで慣れ親しんできたカードフォームの単一ファイルを維持しつづけることになるので、探索上、複数ファイルをみる必要はなく、利用者の抵抗は少ないであろう。また、部分的なコレクション・データベースによるCOM目録やオンライン目録を計画し、提供するのに要する費用を、将来の統合コレクション・データベース構築にまわすこともできる。しかし、再三にわたって指摘してきた大規模なカード目録維持をめぐる問題は一層悪化をみることになる。

パークレー校図書館をはじめほとんどの報告書で想定されている中間期の目録は(2)の方法である。この方法には二つの問題がある。ひとつは旧目録の処置でありもうひとつは新・旧目録の標目を関連づける方法である。前者についてはすでに述べた通りであるが、適及的変換を実施しても統合コレクション・データベースが完成するまでは、複数ファイルの問題を免がれることはできない。⁴²⁾複数ファイルを利用者に提供せざるを得ない場合には、利用上の障害を最小限にするような新旧目録間のリンクを工夫する必要がある。また、利用者援助や指導などを通して、利用者に複数ファイルの存在を周知徹底させるとともに、将来のオンライン目録システムが、現行システムよりもはるかに大きな利益をもたらすことを、あら

ゆる手段を駆使して訴えてゆくことも中間期の大切な仕事になる。

いずれにせよどのような対策を考えてみても、中間期の目録については唯一かつ容易な解決策を見出すことが難しいと思われる。

IV. 1981年の選択—現行カード目録の 継続/編成中止

現在、アメリカの図書館（主として大規模なカード目録をかかえている大学図書館）の管理者に求められている緊急にして、かつ重要な意味を持つ意思決定は、1981年に予定されているLCの目録方針変更への対処に関わるものである。これを、かのハムレットの有名な独白“*To be or not to be, that is the question*”を借りれば“*To close or not to close, that is the question*”と表現できよう。この1981年の意思決定は、基本的には、各図書館が構想する将来の目録システムをふまえた上でなされるものであろう。

1981年に可能な選択の幅は、各図書館固有の事情により相違する。とはいえ、一般的には次のような七つの代替案が考えられる。⁴³⁾

- (1) 現行カード目録を継続し、superimpositionの方針を維持する。したがって、desuperimpositionを採用したLC目録レコード（つまり新標目）を利用する場合、既存の標目（つまり旧標目）と照合して、必要に応じて標目の変更を行う。
- (2) 現行カード目録を継続し、desuperimpositionの方針を採用するが、旧標目は新標目に変更しない。この場合に生じる新・旧標目の分裂を“see also”参照で連結する。
- (3) 現行カード目録を継続し、desuperimpositionの方針を採用して、旧標目を新標目に変更する。この場合、旧標目から新標目への“see”参照がつけられる。
- (4) 資料の刊年により新しいカード目録を開始する。すなわち、1981年以降に刊行される資料は新目録に入れて、それ以前に刊行された資料は旧目録に入れる。旧目録は1981年以前に刊行の資料が収集される限り編成され続ける。
- (5) 資料の刊年により新しい目録をCOMあるいはオンラインで開始する。新目録は機械可読フォームで維持される。1981年以前刊行の資料については(4)と同じ。

第2表 代替案の特徴

代 替 案	1	2	3	4	5	6	7
	現行カード目録継続 superimposition 維持	"	"	"	刊年により 新カード目録 スタート	新目録(COM ・オンライン) スタート	目録作成期 日により 新カード目 録スタート
AACR2/LCへ の適応	不 可	可	可	可	可	可	可
目録作業	LC コピーの 変更 作業増(又は 自館作成)	参照カード のチェック 増加	目録カード のチェック 変更増加	2種類の目録 規則使用	"	1種類の目 録規則使用	"
ファイリング	不 変	参照カード 増で複雑	変更カード の再ファイ ル	新目録が 小規模の間 は簡単	/	新目録が 小規模の間 は簡単	/
カードの変更 ・維持	不 変	増 加	多 量	新・旧目録維 持	旧目録維持	新旧目録に 参照カード	"
現行カード目 録の編成中止 ・凍結	/	/	/	困 難	困 難	可 能	可 能
利用条件	不 変	複雑大	複雑小	新・旧目録利 用	"	"	"
標目の一貫性	不 変	保持しない	保 持	新目録〜一貫 性あり 旧 " ~ 不変	"	"	"
利用時におけ る目録の選択	/	/	/	困 難	困 難	時の経過に つれて容易	"
新技術・規則 変更への順応 性	次第に困難	多少困難	"	新目録〜問題 少ない 旧目録〜困難	新目録〜問 題なし "	容 易	最も容易
機 器	/	/	/	/	必 要	/	必 要
スペース問題	大	大	大	大	小	大	小

(6) 現行カード目録を編成中止し、目録作成期日より新しいカード目録を開始する。1981年以後に作成される目録カードはすべて新目録にファイルされるが、旧目録には新しい目録カードが入らないので、凍結の可能性はある。

(7) 現行カード目録を編成中止し、目録作成期日より新しい目録を COMあるいはオンラインで開始する。この場合、新目録は機械可読フォームで維持される。旧目録については(6)と同じ。

この他にもいくつかのヴァリエーションが考えられようが、上記七つの代替案の主要な特徴を要約したのが第2表である。これらの代替案は、各々に利点と欠点を持っており、いずれが最適な選択であるか判断することはなかなか難しい。しかしながら、図書館の管理者は現行カード目録の継続か、あるいは新目録を開始するかの意思決定は少なくとも行わなければならない。今、上述の代替案を現行目録の維持(代替案1~3)と新目録の開始(代替案4~7)の二つのケースに大別し、後者についての利点と欠点をみると以下ようになる。(前者の場合、こ

の利点と欠点は逆になる)

(利 点)

- (1) 現行カード目録の利用における障害要因となっている規模や複雑さから離れて、新しい一貫した目録の編成が可能となる。
- (2) desuperimposition の採用による現行カード目録内でのカードの大量移動が回避できる。
- (3) ひとつの目録内での標目の分裂がもたらす障害はない。
- (4) 新しい目録が小規模の間、ファイリングが迅速で容易となる(カード目録の場合)。

(欠 点)

- (1) 複数のファイルを探索する必要が多くなる。
- (2) 新・旧目録の存在とその利用の必要性を利用者に揭示、利用援助、利用指導を通して知らせなければならない。
- (3) desuperimposition によって影響を受けない標目については依然として通常の相互参照が必要となり、新・旧目録に相互参照の大量の重複が必要とな

る。

- (4) 目録部門の職員のオリエンテーションとトレーニングが必要となり、新目録の開始時から当分の間、仕事の能率が低下する。

この他に、1981年の選択に関連して検討すべき点が多々ある。そのひとつである逐次刊行物については、その継続的な性質から特別な問題が生じる。特に、新旧二つの目録を維持する場合に、その取扱いが厄介になる。この場合に、主として三つの処理方法がある。(1)旧目録に入っている逐次刊物のカードはそのままにして、新規に受け入れを開始した逐次刊物だけを新目録に入れる、(2)現在、継続中の逐次刊物のカードを旧目録から引抜き、標目を変更せずに新目録に移す。(3)(2)と同じようにカードを旧目録から引抜くが標目を新標目に変更して新目録に移す。三つのうち(1)の方法は、労力や費用の点で一番問題が少ないが、利用者を与える影響は大きい。というのは、利用者は、現在、継続している逐次刊行物は、当然、新目録に入っているものと予想して行動することが多いと思われるからである。(2)の方法は、ひとつの目録に二つの目録規則が用いられることになり、標目の一貫性が保持できなくなる。また、逐次刊行物の所蔵ファイルを別個に維持している場合、(1)あるいは(2)のいずれを採用しても新・旧標目の分裂が生じる。(3)の場合は所蔵ファイルのカードも含めて標目の変更作業が必要になる。このような問題は、同様に多巻もの(百科事典、全集、叢書等)にもあてはまる。

次にあげられる問題は分館および部局図書館の目録である。中央館がその目録について何らかの方針を決定した場合、分館や部局図書館も各々の目録について、中央館の方針に従うか、あるいは独自の選択を行うかの意思決定を迫られよう。分館の選択は、desuperimpositionによって影響を受ける政府刊行物や学会出版物の量、利用者グループの特性、中央館の目録作業への依存度、職員の数といった要因に大きく左右される。

結局、1981年の意思決定にあたって考慮されるべき点は、desuperimpositionをいかに経済的かつ効率的に処理できるか(つまり費用の問題)とその結果が利用者にどのような影響を与えるか(つまり便益の問題)の二つに集約される。前者は比較的計算可能な領域であるが、後者は数量化の難しい領域である。要するに、システム分析の観点⁴⁴⁾からみると、1981年の選択は、判断と計算を総合して、組織(図書館)にとってもっとも有効な戦略的意思決定を行うケースのひとつと理解すること

ができる。

V. 主要大学図書館報告書の特徴と勧告

A. カリフォルニア大学バークレー校図書館(UCBL)

本章でとりあげられている大学図書館の中ではもっとも早い1973年に、書誌調整委員会の下に“目録の将来”に関する小委員会が設置された。小委員会の研究・調査活動は、5年間、四つの局面にわたって続けられた。各局面において提出された報告書は、合せて300頁を越す大部なものであり、そこでは目録の将来に関するあらゆる問題がとりあげられ、詳細に検討されている。以下、各局面の報告書を順を追って簡単に紹介する。

<第1局面>

1975年2月に提出された報告書では、主としてLCがdesuperimpositionを採用した場合に、UCBLはいかなる影響を被るか、それに対してどのような短期的方針を選択すべきか(現行カード目録の編成中止か、継続か)について検討がなされている。検討にあたっては、新目録にはAACRを採用すること、ここ数年間は相当数の古い資料(desuperimposition実施以前に刊行の資料)が入ること、経済的かつ効率的な整理業務を長期ゴールとするが短期的には変換経費の増大が見込まれること、など六つの基本原則・前提が設定された。

小委員会はLCのdesuperimposition採用に対処する方法をいくつか検討したあと、現行カード目録を継続し、旧標目を新標目に変更する方法を委員多数の支持を得て勧告した。この勧告の主たる根拠は、技術の進歩とUCBLの機械化能力からみて、近い将来に新しいフォームの目録を導入できるので、現時点でカード目録を編成中止することは得策でないという認識であった。更に、できるだけ早く機械可読フォームによる新目録作成の実施、機械可読フォームの典拠ファイル形成、および図書館スペース利用の再点検などの勧告が提示された。また、今後の研究課題として、(1)将来の目録の物理的・書誌的フォーム、(2)学内、地域、全国レベルの協同目録作業プロジェクトおよびネットワーク、(3)分館目録、(4)逐次刊行物レコード、があげられている。

<第2局面>

この局面では、書誌コントロール委員会の提示したプランを検討するために三つのタスクフォースが組織され、各々の報告書が1975年10月に提出された。

委員会の提示したプランは次の二つである。

プラン1：単一のアルファベット順目録の維持

プラン2：現行カード目録の全部あるいは大部分が1980年までに機械可読フォームで維持されるといふ前提において新目録の開始

プラン2は、更に (a) コストを考慮せずに、書誌データへの最適なアクセス提供、(b) 現在、許容できる費用内で、書誌データへのアクセスの提供、に分けて検討された。

三つのタスクフォースが研究を進めるにあたって、以下のような共通の前提と検討項目が設定された。

(前提)

- (1) 利用者のニーズを把握し、それとの関連で適切な技術を選択する。
- (2) 1980年までに、新しく作成される書誌レコードのすべてもしくは大部分が機械可読フォームで存在する。
- (3) BALLOTS に参加する。
- (4) 他の図書館との協力・共同事業に参加する。
- (5) UCBL の財政は安定状態が続く。
- (6) 1980年に LCはカード目録の編成を中止し、desuperimposition 方針を採用する。
- (7) UCBL の目録アウトプット (タイトル数) は1980年までに年間約9万に増える。
- (8) 1980年までに、LCを通してオンライン典拠情報の利用が可能となり、その経費は年間2万ドルになる。
- (9) 図書館のサービスポイントは将来にわたってほぼ一定である。
- (10) 世界中から多様な言語、文字、形態の資料を収集し続ける。
- (11) 現在、利用可能なもしくは確実に予測できる技術のみを考慮に入れる。
- (12) データベースに膨大な量のレコードを保持することができる。

(検討項目)

- (1) 書誌データの配布フォームとそれに要するスペース
- (2) 提供すべきアクセスポイント (基本記入、副出記入、件名記入等)
- (3) 提供すべき書誌情報の詳しさ
- (4) オンライン以外のフォームによるデータ配布の頻度
- (5) 本館および分館へ配布する書誌データの内容
- (6) 逐刊データ (書誌データと所蔵データ) のアヴェ

イラビリティと配布

(7) UCBLの書誌データベースと他の図書館のデータベースやネットワークとの関係

(8) コスト

プラン1のチームは二つの代替案、つまり①現行カード目録の継続、②現行カード目録の機械可読フォームへの変換 (a. カード以外のフォームによる目録の作成、b. オンラインアクセス) を検討した。その結果、カード目録の成長によるスペースおよびファイリングなどの問題の深刻化を重視して①の方法を拒否し、また②のb、つまりオンライン目録システムの実現もまだ遠い将来と予測し、結局、中間段階としてCOM目録を勧告した。プラン2・aのチームは、オンライン目録を“理想的”な目録とみなし、機械可読フォームによる新目録の開始時(1980年)に、現行カード目録を編成中止し(5年間はこのカード目録を残す)、新目録のフォームとしてオンラインを採用することを勧告した。プラン2・bのチームは現行カード目録を編成中止し、機械可読フォームによる新目録の開始を勧告した。この段階の目録として、テクニカルサービスにはオンラインターミナル、中央館および分館のパブリックサービスにはCOM目録(冊子体の補遺を伴う)を配置する案が提示されている。加えて一般参考サービスをはじめとする主要サービスポイントには、検索用ターミナルの配置も可能であると指摘している。このような勧告は中間的なものであり、財政が許せば、現行カード目録を機械可読フォームに適及的に変換し、最終的には統合コレクション・データベースに基づくオンライン目録システムを実現すべきことを主張している。

<第3局面>

この局面の報告書の内容は、1973年以来、書誌調整委員会の下で続けられてきた研究・調査を集大成したものである。そこでは、UCBLの採るべき将来の方向と具体的な行動プランが提示されている。

(将来の方向)

- (1) 機械可読フォームの統合データベースを構築すること。
- (2) 広範囲のサービスポイントからデータベース全体が利用できること。
- (3) 利用者に対するオリエンテーションと援助プログラムを拡大、改善すること。
- (4) LC/MARC フォーマットなどの全国書誌基準に可能な限り従うこと。

1980年代の目録をめぐるアメリカの動向

第 3 表 計 画 表 注)

年度	1976/77	1977/78	1978/79	1979/80	1980/81	1981/82	1982/83	1983/84	1984/85	1985/86	1986/87
目録カード	中央館カード目録のカード作成 分館カード目録のカード作成										
機械可読フォーム への変換				中央館カード目録(著者/書名 および件名)の変換					分館カード目録の変換		
目録データ				すべての新しい目録データを機械可読フォームで維持							
				目録のバックアップ(年刊累積 COM 目録)							
ターミナル	テクニカルサービスのターミナル 5台			パブリックサービスのターミナル 5台 5台 5台 5台 10台 20台 15台							
注文中データ	注文中・整理中リストのフィッシュを必要箇所配布					注文中・整理中データへのオンラインアクセス					
全体計画	中央館カード目録(著者/書名および件名)の編成中止			すべての目録カードを コンピュータにより作成				目録カード の作成中止		分館カード目録 の編成中止	

出所) University of California, Berkely. General Library. Committee on Bibliographic Control. *Future of the general library catalogs of the University of California at Berkeley: Report-Phase 3 on the future of the catalogs.* p. 5.

注) この計画は1980年の LC 目録方針変更を前提としている。

- (5) データの表示には様々なフォームを用いること。
- (6) 新しい書誌データベースにおいて、少なくとも現在のカード目録と同じアクセスポイントを提供すること。
- (7) 統合データベースが実現するまで、機械可読フォームとカード目録の新・旧データベースを用いること(新・旧データベースは目録作成期日によって分ける)。
- (8) 中央館カード目録は1980年までに編成を中止し、分館カード目録も適宜編成を中止してゆくこと。
- (9) 統合データベースの完成まで、新・旧データベースを参照によって連結すること。
- (10) マイクロフォームおよび冊子体においても分割目録(著者・書名と件名)を採用すること。

行動プランは第3表に示した通りである。

<第4局面>

UCBLのとるべき基本的な方向は、第3局面で一応の帰結をみたわけである。しかし、そこで提示されたのはあくまでも全体的なアウトラインに過ぎず、いわば総論といえるものである。これに対して、1978年8月に提出された第4局面の報告書は、各論の位置を占めるもので

ある。

この局面において、八つのタスクフォースが組織され、総計30人を越える館員が参加し、将来の目録についての諸問題を検討した。その問題というのは、典拠構造とリンク、分館、非ローマ字資料、施設および装置、利用者および館員との関係、レコードのフォーマットとディスプレイ、逐刊の七つである。これらはいずれも、第1局面から第3局面を通して一般的なかたちで言及されてきたが、この局面では各タスクフォース・チームが、様々な条件を考慮し、詳細に分析した。

この報告書はバークレー校図書館の各種委員会や部門に配布され、それについての意見が求められた。その結果、1979年1月に報告書に対してレファレンスサービス委員会/目録利用グループをはじめ四つのグループからの評価が寄せられた。

以上、きわめて大雑把に UCBL の報告書を紹介してきた。この UCBL の事例は、そこで扱われている内容もさることながら、形式つまり意思決定プロセスの面からみても特に興味深いものがある。というのは、この事例は目的設定→目的達成の代替案提示→モデル形成→費用と効果の比較→代替案の順位づけ、というシステム分

析的アプローチの典型を示しているからである。

B. コーネル大学図書館 (CUL)

1977年12月に勧告を提出した CUL の委員会は、パークレーをのぞけば早い時期に当たる1976年9月に設置された。その時期は、カード目録編成中止について参考とすべき他大学図書館の報告書は極めて少なく、LC の目録方針変更の予測ははされていても未発表の段階であった。従って、CUL の報告書では、問題点を明確にするために実施した調査結果、機械化の実施計画といった自館の現状分析に重点がおかれ、個々の問題の方針決定には至らず、問題提起で終わっている。

委員会に対する館長の諮問は、“利用者への適切なサービス、費用便益、蔵書の書誌コントロール、目録設置スペース等を勘案した”将来の目録について、短期、長期計画の目標を作成することであった。長期の目標は勧告中に述べられており、以下の点である。

- (1) CUL は ACR 2 採用の時点で現行のカード目録を編成中止すべきである。
- (2) カード形態を MARC フォーマットによるオンライン・データベースに変更すべきである。そして一部分はミニコンピュータと COM によって補う。このシステムの必要条件は CUL のユニオンリストであること、少なくとも現行レベルのアクセスポイントを提供し、データベースには完全な書誌情報を含むことである。
- (3) この新局面は整理業務システム——受入、逐刊、貸出、リザーブ——のひとつの構成要素であり、段階的实施を直ちに始めるのがぞましい。また他の図書館の動向に注目する必要がある。

一方、短期の目標は、協議事項中にもり込まれているが、そのいずれを取り上げても、即決は困難である。他の報告書にみられるように、LC による目録方針変更の実施如何、コンピュータ技術の発展に関わるものなど、検討を継続すべき点を多々ふくんでいる。以下にその項目だけを記す。

- (1) カード目録編成中止時の問題点
 - a. 刊年か、目録作業実施時期か
 - b. 逐次刊行物や継続出版物の扱い方
 - c. 旧目録の処置
 - d. オンライン目録への完全移行が不可能な場合の中間期目録
- (2) 将来の書誌レコードの範囲

現行辞書体目録に代替可能なもの、主題アプロー

チ、非ローマ字資料等

- (3) 書誌レコードの機械化
- (4) 館員の配置・再教育

以上、四つの局面のうち第1局面は新目録に関連して、MARC 単行本、同逐刊、同その他フォーマット、典拠ファイル…/受入システム、COM 作成、逐刊システム…と年毎に段階的にすすめる。第2局面は旧目録の変換関係、第3局面はオンライン目録関係であるが、この二つの局面については具体的な内容が明示されていない。

この他に、将来の目録を検討するに際し、継続維持と編成中止にわけ、前者については AACR 2 採用後の新・旧標目の問題を取上げ、また後者については、新しく生ずる問題を取上げている。

CUL 委員会の検討は、個別問題について具体性を欠きその概要をしめすにとどまっているが、活動時期が早かったために、これらの結果は他大学図書館に対して問題の所在、解決方法等に関するひとつの指針を与えることになった。

C. プリンストン大学図書館 (PUL)

PUL 委員会の特徴は、既に公表された他大学図書館の報告書で明らかにされた点については、検討の重複をさけたこと、また、電話等の方法で情報収集を行い、1976年11月から1977年5月の短期間に結論を得たことである。

委員会の任務は次の2点である。

- (1) 文献調査、書簡、電話、訪問によって関係データを収集する。特に LC、Research Libraries Group (以下 RLG と省略)、ARL の動向に注意を払う。
- (2) PUL の採るべき選択を決定する。その際に、経費、機械化以前の蔵書及び逐次刊行物のデータベース化、分館の目録等を考慮する。

(1)に関しては、1975年1月の ARL 会議の報告書、および1973年委員会発足後、幾度か公表された UCBL の報告書に注目した。目録利用調査に関しては、過去10年間の調査に限定し、その中では、エール大学とミシガン大学をややくわしく取り上げている。また、CUL や YUL の委員会と接触し、後者と共にニューヨーク公共図書館のカード目録編成中止、ABC システム (コンピュータによる冊子体目録刊行)、週及ファイルのフィルム化を視察した。電話による目録の将来計画の聴取は、コーネル、インディアナ、ミシガン、ノースウェスタン、オハイオなどの11大学図書館に及んだ。

1980年代の目録をめぐるアメリカの動向

(2)に関しては、先行の調査結果を検討の後に、未解明の点につき PUL 目録で調査を行った。従って、その結果は、量的側面だけにとどまらず、書名副出カードの欠落、件名標目の不統一、請求記号の不備等の質的側面にふれ、カード目録の複雑さを分析している。次いで、LC 目録方針の PUL に与える影響および機械化目録の進捗状況にふれた後に、現行カード目録を継続維持と編成中止に二分して、問題点を比較検討している。

以上の結果から、次の長期と短期の目標が勧告された。

長期の目標：COM 目録で補完したオンライン目録

短期の目標：LC の変更実施に合わせて、カード目録を編成中止しオンライン目録に移行する。オンライン目録実施が遅れた場合は、閲覧目録を編成中止し、LC の方針に準拠した中間期目録を編成する。その形態は新カード目録か COM 目録とする。

この目標達成のために、継続検討あるいは実施されなければならないこととして次の6点が指摘された。

- (1) PUL 利用者の目録ニーズの調査
- (2) 現行カード目録の機械可読フォームへの適切的な変換計画
- (3) PUL 機械化のトータルシステム
- (4) 他の図書館ネットワークからのデータベースの利用に関して、RLG, BALLOTS, シカゴ大学システム, OCLC などの選択 (PUL は 1974年に OCLC に加入)
- (5) 中間期目録編成のコスト
- (6) プランニング担当職の新設

D. ユール大学図書館 (YUL)

1976年12月から1978年10月まで約2年間の活動をした委員会の成果は、YUL の目録に影響のある要因が、多くの不確定部分を有することを理由に、予備報告として提出された。

委員会活動時期の後半は、LC のカード目録編成中止の正式発表後の11ヶ月間に相当しており、LC の方針を十分に検討することができた。しかし、YUL が報告書において指適したように、その方針には非ローマ字資料や国内逐次刊行物機械化システム等について未決定部分を多く含んでおり、同様の条件をもつ YUL に与えるその影響を明らかにできなかった。また、YUL がそのメンバーとなっている RGL が BALLOTS をデータベースとして使用することを決定したのは1978年3月でありそれ以後報告書の提出までは短期間であったことから、BALLOTSについても不十分な検討に終わっている。また

YUL は AACR 2 の草稿を入手し、その大要を把握し得たが、詳細についての研究までには至らなかった。以上、いくつかの不確定要素を挙げたが、一方では他大学図書館の報告書の刊行により、編成中止にともなう問題点は或程度明らかにされていた。

このような状況下で、委員会は五つの小委員会を設置し、YUL のカード目録の調査、AACR 2、データベース (BALLOTS/RLG) を検討し、YUL のカード目録編成中止の可否とその方法を具体的な項目に即して考察した。その項目は、編成中止の基準、分館の目録、特殊ファイル、逐刊、ユニオンカタログ、非ローマ字資料、新旧標目間の関連づけ、中間目録、旧目録の措置、館員の対処と広範囲にわたっている。

勧告は16項目にわたり、将来到達すべき目標を設定している。しかし、その実現には相当期間を要し、その間にコンピュータ技術の進展をはじめとする条件の変化を予測して、各項目毎に問題の背景、現段階での YUL のとるべき対処等の詳細かつ具体的コメントを付している。

勧告中、他の報告書にみられない点のみ簡単にふれてその他は項目の列記にとどめる。

a) AACR 2 の適用について

AACR 2 は標準規則として、また、LC がそれを採用することによって多くの研究図書館で受容されるであろう。この規則は機械可読フォームに最適に作成されているが、現在のように非ローマ字資料等が機械化されていない時点で、YUL が直ちに AACR 2 全体を、同時に採用するのは適切でない。

b) BALLOTS への加入

c) カード目録の編成中止

現在、技術的にはオンライン目録の稼動が可能である。これが YUL で実現した時点でカード目録の編成を中止すべきである。現状では画一的に中止する可能性はなく、中央館及び二、三の大規模目録を有する分館にのみ適用する。

d) 将来の目録

オンライン目録、リアルタイム、CRT ターミナルによる。

e) 中間期の目録

f) 中間期目録のフォーム

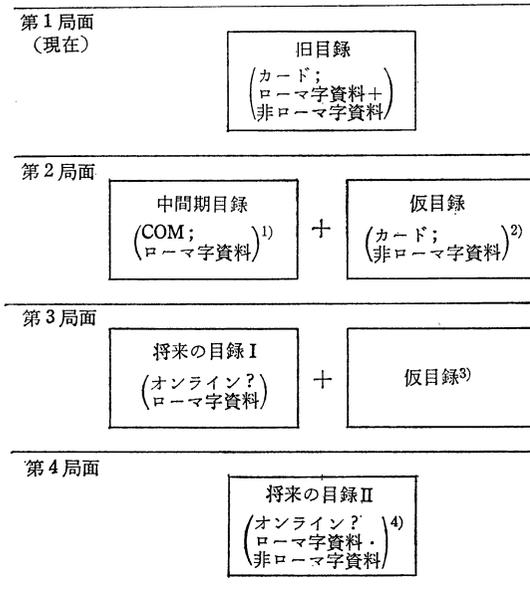
g) 分館の目録

h) 特殊ファイル

i) 編成中止の期日

現時点で期日の決定は不可能、実施は段階的に行う。

第2図 目録の段階的移行



出所) Yale University. The Library. Committee on the Future of the Catalog. *Preliminary Report*, p. 28-29.

- 原注1) 第3局面実施の際に廃止され、この時点で MARC のファイルは将来の目録のベースとなる。
- 2) 仮目録はフィッシュまたはフィルムの形に再製される。
 - 3) 第2局面の仮目録と同じであり、その期間は第2~3局面にまたがる。
 - 4) 多種の非ローマ字資料は順次移行して第3から第4局面にうつる。完全に移行すれば第4局面の統合ファイルとなる。将来の目録IとIIの相違は非ローマ字資料を含むかどうかによる。Iには原則としてふくまれていないので仮目録で補完する。第4局面は理想像で、実現時期は不明。実際には第3局面の実現がのぞましく、この場合は仮目録が少ない程よい。

j) 編成中止の方法 (第2図を参照)

k) ユニオンカタログ

現在、ふくまれていない資料を加えて維持し続ける。

- l) 逐次刊行物
- m) 非ローマ字資料
- n) 館員教育等
- o) 広報活動
- p) 旧目録の処置

E. ミシガン大学図書館 (MUL)

MUL では、目録システムに下記の3点が及ぼす影響

を検討するため、1977年9月に二つのワーキンググループが組織された。

- (1) 1980年に予定されている LC の目録方針の変更
- (2) カード目録を編成中止し、他の目録フォームの採用を予定している大規模大学図書館の計画
- (3) 機械可読ファイルを利用した効果的な書誌レコードディスプレイの開発

1978年6月に提出された報告書の第1部は“目録の編成中止”に関するワーキンググループの報告である。このグループは、MUL のカード目録の現状を調査し、AACR2 採用および LC 件名標目システム変更のもたらす影響を予測し、1980年に採用可能ないくつかの代替案とそれに付随する特別な問題 (典拠コントロール等) を検討した。1980年の方針を勧告するにあたって、代替案にかかわる変数や未知の数量が多いので確実なコスト計算が難しく、その上、MUL に未だコレクション・データベースと自動典拠コントロール・システムが確立されていない時点で、目録の編成中止を強いられるのは不幸な事態であるというワーキンググループの見解を表明した。

そこで、ワーキンググループは上述のデータベース構築と典拠システムの利用が可能となり、カードフォームに代る目録フォームの利点が十分に確認されるまで、現行カード目録を継続してゆくことを1980年の方針として勧告した。⁴⁶⁾ ただし、1980年に AACR2 を採用し、LC の desuperimposition への対応策として、第IV章であげた代替案 (1), (2), (3) の三つを利用者に与える影響を考慮しながら折衷する方法を提示している。また、現行カード目録の適宜の変換を技術的および経済的側面から研究する必要のあることも指摘している。結局、第1部の報告の基本的な姿勢は要約すると、目録の機能を阻害する要因を最小限に抑え、将来、新しい目録システムの導入を可能とするように現行システムの柔軟性を最大限に保ちながら、この困難な時期 (つまり中間期) を凌いでゆこうとするものである。

報告書の第2部は“書誌的アクセスおよびディスプレイ・システム”に関するワーキンググループの報告から成っている。この報告でとりあげられている論点は、MUL 目録システムのいわば中・長期的展望にかかわるものである。すなわち、(1)機械可読書誌レコードファイルに基づく目録システムの長所、(2)(1)のシステムの計画・実施にあたって考慮すべき点、(3)機械可読書誌レコードファイルの構築と維持、(4)機械可読ファイルによる各

1980年代の目録をめぐるアメリカの動向

種目録フォーム、(5)新しい書誌システムと既存カード目録との関係、の5点である。特にこのグループの報告の特色として指摘できるのは、コレクション・データベースの構築・維持に利用できるシステムをいくつか検討している点である。そこで対象になっているシステムは、(1) OCLC に代表される書誌的事業 (Bibliographic Utilities)、(2) BALLOTS、トロント大学機械化システム、シカゴ大学図書館データマネジメントシステムといった他大学の開発したシステム、(3)商業サービス、(4)ミニコンピューターを利用した内部システム、である。MUL としては、将来の地域協力やネットワーク (中西部) を考え合わせるとシカゴ大学システムが望ましいと認めながらも、いずれのシステムも開発中あるいは改革中の要素が多い理由から、どのシステムを選択するかの結論は下せないとしている。

このワーキンググループの勧告は以下の通りである。

- (1) 新しい書誌コントロール・システムの中核を形成するために、書誌レコードファイルを機械可読フォームで構築・維持すること。
- (2) 機械可読レコードから作られる目録フォームやサービスを検討すること。
- (3) カード目録システムに代る将来のシステムがテクニカルサービスやパブリックサービスに与える影響を究明すること。
- (4) カードフォームに代る目録フォームが採用された場合、既存カード目録の処理方法を研究すること。
- (5) 収書、整理中、貸出しデータを含む書誌アクセス・コントロールの総合システムを設計すること。
- (6) 図書館職員あるいは図書館外の人々にカード目録の将来に関する情報を伝えるための宣伝や討議等のプログラムを計画・実行すること。

以上、MUL 報告書の概要であるが MUL の取組みは UCBL に較べるといくつかの面での遅れが目につき、コスト面の分析が省かれているなどの欠陥がある。しかしながら、1980年の選択を含めて MUL の事例は、現在、部分的にもコレクション・データベースを所有していない大学図書館の行動を示すものとして興味深い。

F. スタンフォード大学図書館 (SUL)

SUL の委員会は、比較的最近に当る1978年4月～9月に設置されており、その活動は6ヶ月間と最も短期間である。これは問題点を限定し、BALLOTS を有するスタンフォードの特殊性に焦点をあわせて、しかも文献中心の検討に終始したためである。

SUL の報告書は簡潔であるため、BALLOTS の内容について詳細な記述はないが、1973年以来の新着資料を機械可読ファイルに入力しており、現在は約25万のレコードがあり、プロセッシングファイルに約75,000、レファレンスファイルに25,000のレコードをもっている。これは蔵書へのオンラインアクセス実現の基盤を提供している。しかし新目録規則への変換が BALLOTS システムで出来るか否かが、将来の目録の勧告にあたって重要なポイントになっている。現在、典拠集中コントロールの開発がはじまっており、LC の典拠ファイルとの関連づけ、BALLOTS の書誌ファイルとの関連づけが進められている。

SUL に対する勧告は6点あり、各項目ともその背景をのべ、採用した場合の利点と欠点が併記されている。

- (1) 1981年に AACR 2 を採用すべきである。LC の件名、分類、統一書名は継続すること。
- (2) 中央図書館の閲覧目録は凍結すべきである。分館も同様に扱う。その後は新目録を開始し、両目録の標目間を完全に関連づけること。
- (3) 閲覧用書誌ファイルとして BALLOTS を利用すること。
- (4) オンライン目録の補完として COM 目録 (補遺版と月刊累積版) を作成すること。
- (5) 閲覧、収書、整理部門の館員は、利用者やその他の館員の教育総合プログラムに協力すること。
- (6) オンライン目録への変換およびその他の勧告適用に関する詳細な計画を開始すること。

凍結した目録中の逐次刊行物の取扱い、オンラインと COM の記入フォーマット、政府刊行物の取扱い、旧目録の機械可読フォームへの適及的変換等々、未解決な問題が残っており、それらについて調査、検討の継続が必要である。具体的な進捗をはかるために、図書館が承認した運営委員会や調整グループを組織すること、あるいはプロジェクト毎のグループをつくるのが提案されている。

SUL 報告書の内容は、勧告と検討事項のいずれにおいても他大学の報告書と大同小異であって独特なものは見られない。しかし、将来の目録は機械可読ファイルに密接な関連を有するのであるから、かかる意味で、スタンフォード大学はオンライン目録システムの具体化の可能性を持つ最も注目すべき大学の一つといえよう。

VI. おわりに

以上、大規模大学図書館の動向を中心に、将来の目録をめぐる問題を概観してきた。しかし、本稿の冒頭で指摘したように、本来、この問題は不確定要因を多く含むものであり、これに加えて、中小規模の図書館の動向が今後の研究課題として残されていることもあり、ここで結論を述べることは難しい。

そこで、これまでみてきたアメリカの動向が、わが国の図書館（特に大学図書館）にとっていかなる意味を持ち、どのような示唆が得られるかを考えて、本稿の結びとしたい。

わが国における大学・研究図書館の目録の機械化の現状は、少数の図書館が個別に冊子体目録の作成を中心に機械化を実施ないしは計画している段階である。残りの大部分の図書館は日本 MARC の利用に多大の期待を寄せている。この日本 MARC は解決すべきいくつかの問題をかかえているとはいえ、すでに国会図書館では実用化の段階に入っており、近い将来、何らかのかたちで大学図書館でも利用可能となるであろう。⁴⁶⁾ その上、技術的および財政的な問題を多く抱えているので、その実現はかなり先のことになると思われるが、今年6月に学術審議会が発表した『今後における学術情報システムの在り方について（中間報告）』において、学術情報システムのひとつの機能として OCLC タイプのネットワークが構想されている。こうした動きからみて、わが国において、目録の機械化への端緒がまさに開かれつつあると言って差し支えなからう。

とすれば、この領域で、試行錯誤をくり返しながらか前方を歩んでいるアメリカの図書館の経験を参考にする意味も出てこよう。このことは、必ずしもアメリカの進んでいる道がわが国にとっても適切であるということの意味しているわけではない。彼我の条件の相違を十分にわきまえて、すぐれた点は学び取り、無駄な失敗をくり返さないというのが、後から進むものの知恵ではなからうか。

もうひとつ指摘しておきたいことは、問題への取組み方についてである。往々にして、図書館の機械化にはひと握りのいわゆるコンピュータに強い人々だけが関係し、他の人々はそれに反発するか、もしくは無関心を装う傾向がみられる。本稿で紹介したいいくつかの大学図書館では、図書館のあらゆる部門からの館員の参加を要請し、様々な視角から将来の目録についての問題を検討

し、分析している。そして、そこで得られた結果は、図書館内外に広く公表され、それに対するフィードバックが求められている。このような開かれた姿勢を我々は学ぶべきではなからうか。あらゆる部門から多くの人々の参加を求め、各々の立場からの種々様々な意見を聞き、それを調整してゆくプロセスは、確かに時間がかかり効率の悪いものである。しかしながら、目録の機械化は、究極的には図書館の包括的な書誌コントロール・システムの確立につながるものであり、すべての部門の業務に関係してくることを考えると、これは図書館全体のコンセンサスを得ながら進めてゆくに値する計画といえる。また、この問題と取組むためには個別図書館の枠を越えて他の図書館との協力も当然必要とならう。更に留意すべき点は、利用者のニーズを考慮に入れてプランニングをすすめることである。概して、図書館の機械化においては、作業能率と経済性の面のみに関心が集中し、利用の面が疎かにされる傾向が間々みられる。目録のように図書館利用に極めて深いかかわりのあるサービスは、利用者のニーズと行動を把握した上で提供されることが望まれる。⁴⁷⁾

（付記 本稿の一部は1979年9月の日本図書館学会月例研究会で発表したものである）

- 1) Savage, Noel. "News report 1978," *Library journal*, vol. 104, Jan. 15, 1979, p. 163.
- 2) “編成中止” (closing) と “凍結” (freezing) の定義は、文献によって多少の相違もしくは混乱がみられるが、本稿では次のように定義する。“編成中止”とは、現行カード目録の編成を止めた後、いかなる新しい記入（カード）をも繰込まないが、既存カードについては内容の追加、訂正、図書廃棄によるカード引き抜きなどのメンテナンスを続けることを意味する。これに対して、“凍結”は現行カード目録の編成を止めた後、新しい記入の追加やメンテナンスを一切行わないことをいう。
- 3) バークレー校図書館の報告書は以下の四つが提出されている。
University of California, Berkeley. General Library. Committee on Bibliographic Control. *To close or not to close: Desuperimposition and the future of the catalogs; report of the Subcommittee on the Future of the Catalogs, Committee on Bibliographic Control, phase I.* Feb. 1975.
University of California, Berkeley. General Library Committee on Bibliographic Control. *Future of the catalogs; phase 2 reports.* Oct. 1975.
University of California, Berkeley. General

- Library. Committee on Bibliographic Control. *Future of the general library catalogs of the University of California at Berkeley: Report-phase 3 on the future of the catalogs*. Aug. 1976. University of California, Berkeley. General Library. *Future of the general library catalogs, phase IV reports*. Aug. 1978.
- 4) Cornell University. The Library. Task Force on the Future of the Cornell University Libraries Card Catalogs. *Report*. Dec. 1977.
 - 5) Princeton University. The Library. Committee to Study the Future of the Princeton University Library Catalog. *Report*. May 1977.
 - 6) Yale University. The Library. Committee on the Future of the Card Catalog. *Preliminary report*. Oct. 1978.
 - 7) University of Michigan. The Library. *Bibliographic access in the University of Michigan library*. June 1978.
 - 8) Stanford University. The Library. Study Group on the Future of Stanford's Card Catalogs. *Report*. 1978.
 - 9) Kimbrough, Joseph. Foreword. (Gore, D., Kimbrough, J. and Spyers-Duran, P., ed. *Requiem for the card catalog: Management issues in automated cataloging*. Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1979) p. i.
 - 10) Hanson, Eugene R. and Daily, Jay E. Catalogs and cataloging. (Kent, Allen and Lancour, Harold, ed. *Encyclopedia of library and information science*. vol. 4, New York, Marcel Dekker, 1970) p. 266.
 - 11) Hyman, Richard J. *From Cutter to MARC: Access to the unit record*, New York, Queen College Press, 1977. p. 1.
 - 12) Library of Congress. *Annual report of the Librarian of Congress for the fiscal year ending September 30, 1977*. Washington D.C., 1978. A-3, A-12.
 - 13) The New York Public Library. *Dictionary catalog of the Research Libraries, supplement, Q-Z*. 1976. p. iii.
 - 14) Cornell University. *op. cit.*, Appendix 2.
 - 15) Angell, Richard S. and Rather, John C. The Library of Congress card catalog; an analysis of problems and possible solutions. (Association of Research Libraries. *The future of card catalogs, report of program sponsored by the Association of Research Libraries*. Washington D. C., 1975) p. 46.
 - 16) "100 most used heading," *LC information-bulletin*, vol. 39, June 15, 1979, p. 216-7.
 - 17) Lubetzky, Seymour. *Principles of cataloging; phase 1; descriptive cataloging*. Los Angeles, Institute of Library Research, University of California, 1969, p. 74.
 - 18) Angell, *op. cit.*, p. 46-57.
 - 19) 説明付ガイドカードとは、約1cm程、丈の高いカードを用いて、先づ、新標目の所に、その標目の使用開始時期とそれ以前の資料は関連旧標目の下にあることを指示し、次いで旧標目の所には、同様に使用停止時期とそれ以後の資料は新標目の下にあることを案内したものである。新旧標目の変更が1対1に対応していない場合は、新標目の所は上記の方法により、旧標目の所では複数の標目について説明する。以下に例を示す。

SOCIAL SECURITY. This heading used beginning June 1975.
See INSURANCE, SOCIAL for earlier materials

INSURANCE SOCIAL. This heading discontinued June 1975.
See SOCIAL SECURITY for later materials

NEGROES. This heading discontinued February 1976.
See AFRO-AMERICAN for later materials on permanent residents of the United States. See BLACKS for later materials on persons outside the United States.

Library of Congress. Processing Department. *Cataloging service*, no. 119, Fall 1976. p. 22-5.

 - 20) "LC to freeze card catalog." *LC information bulletin*, vol. 36, Nov. 4, 1977, p. 743-6.
 - 21) Association of Research Libraries. *Freezing card catalogs. A program sponsored by the Association of Research Libraries*. Washington, D. C., 1978.
 - 22) "AACR 2 endorsed, implementation delayed," *LC information bulletin*, vol. 37, Aug. 18, 1978, p. 485-6.
 - 23) Malinconico, S. Michael and Fasana, Paul J. *The future of the catalog: the library's choices*. New York, Knowledge Industry Publication, 1979, p. 21.
 - 24) *Ibid.*, p. 43.
 - 25) UCLA. Working Group on Public Catalogs. Subgroup B. *Interim report. State of the art and alternative*. 1974, p. 45-68. (ED 121 324)
 - 26) University of Michigan. *op. cit.*, p. 20-48.
 - 27) ロサンゼルス校図書館からもいくつかの報告書が刊行されているが、ここでは最終報告書だけを挙げておく。
UCLA. Working Group on Public Catalogs.

Final report. Jan. 1976. (ED 121 322)

- 28) これらの大学図書館の報告書は、ジョンズ・ホプキンス大学図書館が刊行している *Alternative catalog newsletter* (1978年5月創刊) に収録されている。
- 29) データベースおよびこれに関連する用語 (ファイル, レコード, インデックス等) の定義は明確ではなく、多分に混乱しているところがある。本稿では Brett Butler による “コレクション・データベース” と “リソース・データベース” の定義を採用する。しかし、必ずしもすべてこれに従うわけではない。
- “コレクション・データベース” とは、個別の図書館が所有しているものであり、オンゴーイングベースで維持されている機械可読ファイルである。個別図書館もしくは個別図書館システムの蔵書全体あるいは一部の書誌レコードであり、他の図書館については情報を含まず、また出版物情報の一般書誌とも異なる。本来、コレクション・データベースは所蔵や配架位置の情報を含むものである。代表的なコレクション・データベースとして、トロント大学、オハイオ州立大学、ロサンゼルスカウンティ公共図書館システムのデータベースがある。
- “リソース・データベース” は複数の図書館の所蔵する資料を含んでいる。特定の図書館蔵書の書誌レコードを包括的にカバーしているかもしれないし、そうでないかもしれない。標準的な情報以外に、個別図書館に特有の情報はオプションである。主たるリソース・データベースは LC/MARC であり、次いで OCLC のデータベース (LC/MARC を除いた部分) である。
- Butler, Brett. Collection and resource data bases in bibliographic management. <Gore, *op. cit.*> P. 3-8.
- 30) この点に関連して、多少古くなるが K.J. Bierman が1974年末から1975年初にかけて公共、大学、専門図書館を対象に実施した調査を紹介する。これは訪問(26図書館)と電話(51図書館)により、コンピュータ利用によるカードフォーム以外の目録フォームの採用と計画について調査したものである。Bierman は調査結果に基づいて、蔵書25万冊以上の図書館についての予想を述べている。以下はその要約である。
- (1) カードに代る目録フォームに対する関心は、きたる2、3年以内に一層高まり、委員会やタスクフォースが設置され、報告書が刊行されるであろう。
 - (2) 若干の図書館はきたる10年以内にカード目録の編成を中止し、他の目録フォームを採用するであろうが、大多数の図書館は少なくとも1985年まで蔵書への主たるアクセスとしてカード目録に頼るであろう。
 - (3) 相当数の図書館がカードに代る目録フォームを採用することになるが、その作製は共同で行うだろう。
 - (4) 新しいフォームの採用によって、まずカード目録が編成中止され、次いで5~10年以内に凍結され、写真的処理によりマイクロ化されるだろう。少なくとも25年間は二つの目録を持つことになろう。
 - (5) カードに代るフォームとして、オンライン目録が圧倒的に多く、それをカード、マイクロフォーム、冊子体で補完することになろう。
- Bierman, K. J. “Automated alternatives to card catalogs: The current state of planning and implementation,” *Journal of library automation*, vol. 8, Dec. 1975, p. 277-98.
- 31) オンライン・ターミナル台数の適切な配置について、待ち行列理論の適用が試みられている。すなわち、到着率 (ポワソン分布適用) とサービス時間 (モンテカルロ法適用) のデータを用いてコンピュータ・シミュレーションが行われている。
- Force, R. W. and Force, J. “Access to alternative catalogs: A simulate model,” *College and research libraries*, vol. 40, May 1979, p. 234-9.
- 32) Malinconico, *op. cit.*, p. 106.
- 33) Gorman, Michael. The economics of catalog conversion. <*Proceedings of the 1976 clinic on library applications of data processing: The economics of library automation*. Urbana-Champaign, University of Illinois, Graduate school of library service, 1977> p. 123.
- 34) Butler *op. cit.*, p. 8.
- 35) John Kountz は、シェルリストが適及的変換に適している三つの理由を挙げている。
(1)不純な情報が少ない、(2)ほぼインヴェントリーに近い、(3)変換作業の間、利用者に迷惑がかからない。
Kountz, John. Shelf list conversion management pitfalls and opportunities. <Gore, *op. cit.*> p. 159.
- 36) トロント大学の適及的変換プロジェクトは1965年に始まり、途中、LC/MARC フォーマットの採用 (1967年) を経て、1976年に完了した。そして、1976年には目録カードの作製が中止され、COM 目録の利用が始まった。
- Blackburn, Robert. “Two years with a closed catalog,” *Journal of academic librarianship*, vol. 4, Jan. 1979, p. 425-6.
- 37) Butler, *op. cit.*, p. 23.
- 38) ミシガン大学図書館の報告書には、OCLC, BALLOTS, トロント大学システム等の特徴が手際よくまとめられている。
- University of Michigan, *op. cit.* part II. p. 59-72.
- 39) *Ibid.*, p. 50.
- 40) Richard M. Dougherty は ARL に参加している図書館の館長に非公式の質問表を送ってカード目録の編成中止について調査した。その結果、一番指摘の多かった問題は典拠コントロールシステムとそれに関連した適及的変換についてであった。

1980年代の目録をめぐるアメリカの動向

Dougherty, Richard M. Closing the card catalog: A survey on the status of planning in ARL libraries. <Association of Research Libraries. *Freezing.... op. cit.*> p. 3-4.

- 41) 英国図書館で開発中の MERLIN システムにおける自動典拠コントロールの簡単な紹介がある。
野村文保, 丸山昭二郎. “典拠ファイルと目録の機械化—『国会図書館著者名典拠録』の刊行によせて—,” 国立国会図書館月報221号, 1979年8月 p. 9.
- 42) オレゴン大学では1975年に既存カード目録をフィルム化し(つまり凍結), それ以後の新しい目録を機械可読フォームで維持している。1976年9月に上述の1975年までのフィルム目録とそれ以後のCOM補遺目録を本館と分館の7箇所配置した。このマイクロ目録システムの利用実態調査が, 1976年秋から1977年秋にかけて3回行われた。その結果, COM目録の不利用がサンプル全体の36%に達することが明らかになった。この不利用の主たる原因は, 利用者がCOM目録の存在を知らなかったためではなく, 利用者の基本的な行動原理(1)情報収集における労力最小化の原理, (2)情報処理俊約の原理, にあるものと説明している。結局, 複数ファイルが利用上の大きな障害となっていることを認め, 単一のデータベースの実現が可能な場合にのみ, マイクロ目録をカード目録の代りとして採用すべきことを指摘している。
- Owyer, J. R. “Public response to an academic library micro catalog,” *Journal of academic librarianship*, vol. 5, July 1979, p. 132-41.
- 43) これらの代替案および第2表は1979年2月にサンフ

ランシスコで開催された Library and Information Technology Association のワークショップで配布された資料(LC出所)に基づき, 若干変更を加えたものである。

- Kaske, Neal. A new catalog: Some ideas on its purpose, form, and planning for it. <Alternative catalog newsletter, no 12-14, June 1979> p. 70.
- 44) 宮川公男編. システム分析概論—政策決定の手法と応用—. 東京, 有斐閣, 1973. p. 3-25.
- 45) このMULと基本的には同じ選択を1981年にとることが, 研究図書館にとって賢明とする主張がある。
Hewitt, J. A., and Gleim, D. E. “Adopting AACR 2: The case for not closing the catalog,” *American libraries*, vol. 10, March 1979, p. 118-21.
- 46) 大学・研究図書館における目録機械化の現状や大学図書館による日本MARCの利用については, 次の報告書を参照。
国立大学図書館協議会図書館機械化調査研究班編. 大学図書館の機械化. 東京, 紀伊國屋書店, 1979.
- 47) アメリカでは古くから目録利用調査が実施されてきており, 今日まで豊富なデータの蓄積がある。一方, わが国では目録利用調査の数はきわめて少なく, またその方法や内容の点においても貧弱なものが多い。この点を痛感して, 筆者らも参加し, 私立大学図書館協会の研究助成を受け, 1978年5月から6月にかけて国際基督教大学図書館でアンケートとインタビューによる二回の目録利用行動調査を実施した。報告書は未刊。